The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『說文解字繫傳』「部敍篇」考
Author(s)	坂内, 千里
Citation	言語文化研究. 2019, 45, p. 81-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『說文解字繫傳』「部敍篇」考

坂　内　千　里

On *Bu-xu pian* of the *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*

SAKAUCHI Chisato

The *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*（i.e. Xiao-Xu-ben), written by Xu Kai in the Southern Tang era, consists of two portions. The first 30 volumes contain his annotation upon the *Shuo-wen jie-zi* which is the oldest existing dictionary, and are named *Tong-shi pian*. In the latter 10 volumes, Xu Kai's original argument is developed.

This paper examines the features of the description of *Bu-xu pian* which is included in the latter portion. In addition, compared with the order of radicals of Chinese characters in *Bu-xu pian*, this paper examines the validity of that ordering in *Tong-shi pian* of the present edition of Xiao-Xu-ben.

Keywords: Xu Kai, *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*, *Bu-xu pian*

一　はじめに

南唐 徐鍇（921–975：以下，小徐と称する）の著した『說文解字繫傳』は，現存する最古の字書である『說文解字』の全体を通して注釈を施した最初の著作である。『說文解字繫傳』（以下，小徐本と称する）は，『說文解字』（以下，『說文』と称する）の許慎の解説である説解に対して注釈を施した「通釋篇」30巻に，「部敍篇」2巻などの論10巻を合わせた全40巻から成る。

この論10巻に含まれる「部敍篇」2巻は，『說文』540部の配列の意義を推論したものである[1)]。『說文』の部の構成・順序について，許慎は「後敍」（巻三十）の中で，「其建首也、立一爲耑、方㠯類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、雜而不越、據形聯系、引而申之、㠯究萬原、畢終於亥、知化窮冥（其れ首を建つるや、一を立て耑と爲し、方は類を㠯て聚まり、物は羣を以て分れ、

1）周祖謨『問學集』（北京　中華書局　1981年　第二次印刷版　総930頁）「徐鍇的說文學」に論10巻の性質について簡単にまとめた部分がある。原文は以下の通り。「通釋部分是解釋許氏原書的說解的，部敍是推陳說文五百四十部排列次序的意義的，通論是發揮文字結體的含義的，祛妄是駁斥前人說字的謬見的，類聚是擧出同類名物的字說明它們的取象的，錯綜是從人事推闡古人造字的意恉的，疑義是論列說文所闕之字及字體與小篆不合的。至於系述，則猶如史記的自序、漢書的敍傳一樣，是說明各篇著述的旨趣的。」（pp.843–844）

同條牽屬し、共理相い貫く、雜して越えず、形に據りて聯系す、引きて之を申べ、旨て萬原を究む、畢に亥に終え、化を知り冥を窮む)」と述べる。

段玉裁『說文解字注』(以下，段注と称する)は，この「後敍」の文(十五篇下)と，「敍」の最後に付された目次(十五篇上)の両者に注釈があり，部の配列についての考え方が明確である。そこで，本稿では，段玉裁と比較しつつ，小徐の部の配列に関する考え方の特徴について考えてみたい。併せて，今本小徐本の部の配列についても検討する。

なお，本稿では，最も善本と称せられる道光十九年(1839)寿陽祁氏(嶲藻)拠景宋鈔本重刊本の影印である中華書局本(1987年：以下，祁刻本と称する)を底本として使用する。「今本」または「今本小徐本」という場合，原則としてこの祁刻本を指す。但し，「部敍篇」については，四部叢刊所収の景古里瞿氏鉄琴銅楼蔵宋刊本[2]が善本とされるため，この瞿氏旧蔵本を用い，「四部叢刊本」と称する。そのほか，兄徐鉉等の校訂本(以下，大徐本と称する)は同治十二年(1873)陳昌治改刻一篆一行本(中華書局　1983年第7次印刷版)，段注は経韻楼本(台湾芸文印書館　1979年第5版)を使用する。

また，本文中の数字は，原則として序数は漢数字で，数値は算用数字で表記する。また，書名・篇名及び(訓読を含む)引用文には原則として旧字体を用いるが，使用フォントの制限により旧字体になっていないものもある。

二　今本小徐本の部の配列について

承培元は『說文解字繫傳校勘記』(以下，校勘記と称する)の中で，「按ずるに此の卷及び下卷譌舛特に甚し、次を倒ずるもの有り、部を脫するもの有り、攙越するもの有り、疑うらくは此の部敍兩篇本楚金の爲る所にあらず、乃ち次立等繫傳の名に傅會し增竄す[3]」と述べ，余りにも誤りが多いため，小徐の作ではなく，次立等の傅会ではないかという疑いを示している。

しかし，小徐自身が各篇の著述の意図を記した「系述篇」に「久しければ則ち昭らかならず、昧ければ則ち次なし、其の緒を抽きて、部敍第三十一から三十二に至るを作る」[4](巻四十)と述べている。また，小徐本の巻三一・三二が失われたという記述はない[5]。以上の2点から，増竄はあったとしても，全てが小徐の作ではないという明確な証拠は示されていないと考え，本稿では，後世の改竄・誤刻などがあるものの，基本的には小徐の作であるとして扱う。

2) 巻三十から巻四十までは，趙宧光旧蔵のもので，黄丕烈・汪士鐘の手を経たものである。祁嶲藻が校訂を行った際には，このうち巻三十・三一は未見である。

3) 以下の引用部分を含めた原文は次の通り。「按此卷及下卷譌舛特甚、有倒次、有脫部、有攙越、疑此部敍兩篇本非楚金所爲、乃次立等傅會繫傳之名而增竄、不知楚金命名之意在條繫通言、不必妄擬聖人序卦也、故其說多支離、然相承已久、姑用趙氏宧光本刪正附錄、俾學者不致淆惑」(校勘記下「繫傳三十一」下)

4)「部敍篇」についての記述は以下の通り。「分部相屬、因而繹之、觸類而長之、以究竟天下之事、久則不昭、昧則無次、抽其緒、作部敍第三十一至三十二」

5) 巻末にある熙寧二(1069)年の蘇頌の題には「舊闕二十五、三十共二卷」とあるのみで，そのほかの欠巻の記述はない。

なお，承氏は「然れども相い承けて已に久し、姑く趙氏宦光本を用いて刪正し附錄す[6]」という。そこで，この承氏の刪正したテキストも参考にしながら，「部敍篇」について検討する。

それでは先ず，今本小徐本「通釋篇」の部の配列と，「部敍篇」のそれとを比較してみよう。参考資料として，小徐本・大徐本・段注のそれぞれの叙目[7]の配列とも比較する。

次の（表1）は，今本小徐本「通釋篇」の配列順に部首番号を振り，その配列と順序が異なるものをまとめたものである。空欄は異同がないことを表し，「欠」は言及がないことを表してい

表1

小徐本			叙目	
通釋篇	部敍篇	叙目	大徐	段注
b105鼻	小字			
b151曰				b158旨
b152乃				b151曰
b153亐				b152乃
b154可				b153亐
b155兮				b154可
b156号				b155兮
b157亐				b156号
b158旨				b157亐
b192富			b193㐭(厚字)	b193㐭(厚字)
b193㐭(厚字)			b192富	b192富
b218尊	欠			
b240囧	欠			
b251彔	b252克	b252克	b252克	b252克
b252克	b251彔	b251彔	b251彔	b251彔
b262祛		欠		
b279网	欠			
b284白	欠			
b293丘	b294丞			
b294丞	b293丘			
b297臥	b301裘			
b298身	b302老			
b299月	b303毛			
b300衣	b304毳			
b301裘	b305尸			
b302老	b306尺			
b303毛	b307尾			
b304毳	b297臥			
b305尸	b298身			
b306尺	b299月			
b307尾	b300衣			
b327丐	欠			
b328畱	b329県			
b329県	b328畱			
b332彡	欠			
b352屮	岩			
b391夭		b392夭		
b392夭		b391夭		

6）注3）参照。

7）それぞれ「敍」の後「後敍」の前に，全ての部を配列した目次のようなものがある。本稿ではそれを叙目と呼ぶ。段氏は「取目」と呼んでいる。

る。最初の「b105鼻（部敍）小字」は，今本小徐本「通釋篇」の百五番目の部首である「鼻」が大字ではなく小字で書かれている[8]ことを表す。

小徐本「部敍篇」のみ欠字となっているものは「b105鼻」・「b218**𠷎**」・「b240囧」・「b279网」・「b284白」・「b327丐」・「b332彣」で，「部敍篇」のみ順序が異なるものは「b293丘，b294瓜」・「b297臥」から「b307尾」・「b328**𥄎**，b329県」である。なお，「b352屵」が，「部敍篇」のみ「岩」となっているのは，明らかに誤刻と考えられる。

「b251录，b252克」は，小徐本「通釋篇」のみ順序が逆になっている。小徐本叙目のみ欠字となるのが「b262杮」，また小徐本叙目のみが順序が逆になっているのが「b391矢，b392夭」である。「b192畐，b193**𠦪**（厚字）」は，小徐本全体の順序が大徐本・段注のそれと異なっている。

「b151曰」から「b158旨」は，段注のみ順序が異なる。これは，段注に「按旨部本在亏前喜後[9]、江聲曰、旨當與甘爲類、今移於此」（五篇上 旨部末注）とあり，「旨」部はもともと「亏」部の後「喜」部の前にあったが，江声の説に従って，段氏が部の配列を変更し「甘」部の後に移したことが明記されている。

それでは，「部敍篇」のみが他と異なるものを中心に見ていこう。

ここで，特に問題になるのは，「b297臥」から「b307尾」である。先ず，「部敍篇」の記述を詳しく見ておこう。原文で大字の小篆となっているところは，太字で示した。なお，「部敍篇」を引用する際は，全て同様とする。また，「部敍篇」は，「通論篇」のように上巻・下巻とは明記していないが，便宜的に巻三一を上巻，巻三二を下巻とする。

> 故次之以**重**、裘衣之重也、故次之以**裘**、童子不衣裘、故次之以**老**、老則毛髮先變、故次之以**毛**、毳細毛也、故次之以**毳**、尸者毛所主也、故次之以**尸**、尸者身也、以身爲尺度、故次之以**尺**、尾尸之後、故次之以**尾**、寢不尸、故次之以**臥**、臥以安身、故次之以**身**、反身必有依、故次之以**𠂤**、衣者身之飾、故次之以**衣**、衣所以明禮、故次之以**履**、履禮也、履所以載人、故次之以**舟**　【巻三二　部敍下】
>
> （故に之に次ぐに重を以てす、裘は衣の重きなり、故に之に次ぐに裘を以てす、童子は裘を衣（き）ず、故に之に次ぐに老を以てす、老いれば則ち毛髮先に變ず、故に之に次ぐに毛を以てす、毳は細毛なり、故に之に次ぐに毳を以てす、尸なる者は毛の主とする所なり、故に之に次ぐに尸を以てす、尸なる者は身なり、身を以て尺度と爲す、故に之に次ぐに尺を以てす、尾は尸の後、故に之に次ぐに尾を以てす、寢（い）ぬるに尸（し）せず、故に之に次ぐに臥を以てす、臥して以て身を安んず、故に之に次ぐに身を以てす、身を反すに必ず依るところ有り、故に之に次ぐに𠂤を以てす、衣なる者は身の飾なり、故に之に次ぐに衣を以てす、衣は禮を明らかにする所以、故に之に次ぐに履を以てす、履は禮なり、履は人を載する所以、故に之に次ぐに舟を以てす）

8）祁刻本・四部叢刊本ともに，部首字は基本的に大字で書かれている。

9）「亏後喜前」の誤りであろう。

承氏校勘記は，「毳細毛也、故」の5文字を削除し，「尸者毛所主也」を「尸者毛所傅也（尸なる者は毛の傅く所なり）」に，「以身爲尺度」を「身爲度（身を度と爲す）」に，「尾尸之後」を「尾在尸後（尾は尸の後に在り）」に，「衣者身之飾」を「衣者身所依（衣なる者は身の依る所）」に，「履所以載人」を「履以載人象舟（履は以て人を載す、舟に象る）」に改めるが，大きな変更はない。

まず裘[10]は衣の重いものであるので「重」部の次には「裘」部が続き，更にこどもは裘を着ないことから「老」部に続く。老いれば毛髪が先ず変化するから「毛」部に続き，細毛という意味の「毳」[11]部に続く。尸は毛の付くところであるから「尸」部が続き，尸（身）を尺度とするから「尺」部が続く。尾は尸の後ろにあるものだから「尾」部に続き，寝る時に尸（死体）のように（仰向けに手足を伸ばして）寝ない[12]ことから「臥」部が続く。寝て身を落ち着かせることから「身」部に続き，身を反す（には必ず依るところがある）ことから「月」[13]部が続く。更に衣は身の飾りであることから「衣」部が続き，衣はまた礼を明らかにすものであり，履は礼である[14]から「履」部に続く。

このように，その是非はさておき，「裘」部から「履」部に至る説明には，その流れに特に不自然なところはなく，順序を変えて説明の辻褄を合わせたものではないと思われる。従って，「部敍篇」の部の配列順が小徐本本来のものであり，「通釋篇」及び叙目は，後に次立等が大徐本に合わせて改めたものと考えられる。承氏も校勘記下に「至臥身月衣四部、書中列重後裘前、此列尾下履上、爲唐本舊次、或楚金本然、而次立依鉉移置也（臥身月衣の四部に至りては、書中重の後・裘の前に列す、此れ尾の下・履の上に列するは、唐本の舊次爲り、或いは楚金本然りて、次立鉉に依りて移置するなり）」（「繫傳三十一」下）と述べ，次立が改めたものだとしている。また，このことから，「部敍篇」を次立らの傅会であるという承氏の説には矛盾があると考えられる。

次に「b293丘，b294众」について見てみよう。なお，引用の際，特に必要がない場合は音注を省略する。以下，同様に扱う。

> 故次之以**北**、北背也、背而求衆、故次之以**丛**、丛衆也、衆依於丘、故次之以**丘**、丘土之厚也、故次之以**壬**、壬者厚也　【巻三二　部敍下】
>
> （故に之に次ぐに北を以てす、北は背くなり、背きて衆を求む、故に之に次ぐに丛を以てす、丛は衆なり、衆は丘に依る、故に之に次ぐに丘を以てす、丘は土の厚きなり、故に之に次ぐに壬を以てす、壬なる者は厚きなり）

10）「裘、皮衣也」（巻十六 裘部）

11）「毳、獸細毛也」（巻十六 毳部）

12）『論語』「鄉黨」に「寢不尸、居不容」とあり，その何晏集解に引く包咸の注に「偃臥四體、布展手足、似死人」とあるのに基づく。

13）「月、歸也、從反身（略）臣鍇曰、（略）故反身爲歸也、古人多反身脩道」（巻十五　月部）

14）『毛詩』齊風「東方之日」に「在我室兮、履我即兮」とあり，その毛伝に「履、禮也」とある。

承氏校勘記は楷書の「丘」を「邱」に作るが，その他の修正はない。

北は背くという意味であり[15]，背けば衆を求めることから，「北」部の後には，衆という意味の「㐺」[16]部が続く。衆は丘に依って立つことから「丘」部に続く。更に丘は土の厚いものであるので，厚いという意味の「壬」部に続く。

ここも，説明に特に不自然なところはなく，小徐本の本来の部の配列は「部敍篇」の通りであったと考えらる。「通釋篇」及び叙目は，後に次立等が大徐本に合わせて改めたものと考えられる。承氏には，この部分についての言及はない。

「b328**𥄎**，b329県」については，その前後の「b327丐」・「b332彣」が欠字となっていることについても併せて考えたい。ここはテキストにかなり問題があるので，四部叢刊本と承氏校勘記の文を併せて引用する。なお，異同のある箇所については，校勘記の文に下線を付して示す。

故次之以**旡**、旡[17]而頍其首、故次之以**頁**、頁**頁**[18]俱首也、故次之以**百**、首、故次之以**面**、鳥之逆者梟其首、故次之以**県**、故次之以**𥄎**、故次之以**須**、須者面之飾、故次之以**彡**、彡飾也、羽旄文事也、故次之以**文**、羽旄之髟、故次之以**髟**、備天下之飾者后

【巻三二　部敍下】

（故に之に次ぐに旡を以てす、旡（いきつま）りて其の首を頍（かたむ）く、故に之に次ぐに頁を以てす、**百**面は俱に首なり、故に之に次ぐに**百**を以てす、首なり、故に之に次ぐに面を以てす、鳥の逆（さか）らう者は其の首を梟（さら）す、故に之に次ぐに**県**を以てす、故に之に次ぐに**𥄎**を以てす、故に之に次ぐに須を以てす、須なる者は面の飾りなり、故に之に次ぐに彡を以てす、彡は飾りなり、羽旄（うぼう）は文事なり、故に之に次ぐに文を以てす、羽旄之れ髟（ひょう）たり、故に之に次ぐに髟を以てす、天下の飾りを備うる者は后なり）　　【以上　四部叢刊本】

故次之以旡、气逆而頍其首、故次之以頁、**百**亦首也、故次之以**百**、首有面、故次之以面、面有**攡**蔽、故次之以丐、面蔽必見其首、故次之以**𥄎**、不順者梟其首、故次之以**県**、首面有須、故次之以須、須爲面飾、故次之以彡、彡飾也、羽旄文飾也、故次之以彣、次之以文、文飾髟髟然、故次之以髟、備飾者后

【以上　校勘記】

15）「北、乖也、從二人相背（略）、臣鍇曰、乖者相背違也」（巻十五 北部）

16）「㐺 、衆立也、從三人（略）臣鍇曰、今謂衆立不動爲㐺也」（巻十五 㐺部）

17）祁刻本は「充」に作る。

18）祁刻本は「**百**面」に作る。読読，解釈ともに祁刻本に従う。

息が詰まって[19]首を傾けるので，「旡」部の後には「頁」[20]部が続く。**百**・面はどちらも首であるので，「**百**」[21]部に続く。首であるので，更に「面」部に続く。この部分を，校勘記は「**百**もまた首であるので**百**部に続く。首には面があるので面部が続く」としている。その後，校勘記は更に「顔に蔽いがあることから，丐部が続き，顔が蔽われれば必ず首が現われることから，**𠂤**に続く。従わない者は其の首を梟（さら）すことから，**県**部に続く」とするが，四部叢刊本は「鳥の逆う者は其の首を梟すことから，**県**部に続き，**𠂤**に続く」としており，「丐」部への言及がない。更に「首」部と「県」部の順序が，校勘記の文とは逆になっている。

「丐」部は，そもそも言及されていなかったのか，伝写の過程で落とされたのか，また承氏の増補が妥当であるのかを判断する材料がない。しかし，「部敍篇」は540部全ての部の配列の意味を説いたものであると考えるのが妥当であるから，伝写の過程での脱誤である可能性は高い。また，承氏が繋がりの説明が難しい「面」・「丐」・「首」部を，「丐」の説解「不見也、象壅蔽之形（見えざるなり、壅蔽の形に象る）」（巻十七 丐部）のうち，蔽いの形に象ったという部分を用いて説明しようとしている点は，小徐の注に「臣鍇曰、左右擁蔽面不分也（臣鍇曰く、左右面を擁蔽して分たざるなり）」とあることから，あり得る形であると考えられる。ちなみに，段氏も「形似雝蔽其面、故次於此（形其の面を雝蔽するに似たり、故に此に次ぐ）」（十五篇上 叙目）としている。

「首」部と「県」部の順序については，「故次之以**県**、故次之以**𠂤**」と並列されているだけであるので，伝写の過程で誤られたと考えても不自然ではない。また，「**百**面、倶首也」とあり，「首」部の方が繋がりが強く[22]，「首」が先にある方が順当である。更に，「**県**、倒**𠂤**也」（巻十七 県部）とあるように，「県」の字は「首」の字を逆さまにしたものであるが，その場合，体例として本になる字が先に来る。次の「匕」・「ㄊ」はそれぞれ「人」・「子」の字を逆さまにしたものである。

匕、變也、從到人　　【巻十五　匕部】
ㄊ、不順忽出也、從倒子　　【巻二八　ㄊ部】

各部の配列順は「人」部が先で「匕」部がそれに続き，「子」部が先で「ㄊ」が後になっている。以上の3点から，小徐本本来の配列順は「首」部が先で「県」部がそれに続いていたと考えられ，「部敍篇」の文は伝写の過程で誤られたものと考えられる。

その後の部分は次のようになっている。なお，承氏による増補は，［　］で示す。

19）「旡、**歙**食气逆、不得息曰旡、從反欠（略）、臣鍇曰、欠息也、故反欠爲不得息」（巻十六 旡部）。校勘記は「旡」を「气逆らう」に作る。86頁参照。

20）「頁、頭也」（巻十七 頁部）

21）「**百**、頭也」（巻十七 **百**部）

22）「**𠂤**、**百**同、古文**百**也、巛象髮」（巻十七 **𠂤**部）

［首には髭があるから］「須」[23]部に続き，須は顔の飾りであるから，飾りという意味の「彡」[24]部に続く。羽旄（うぼう）は飾りであるので［「彣」[25]部に続き，］「文」部に続く。羽旄が軽くひるがえるので「髟」[26]部に続く。天下の飾りを備えるのは后[27]である。

上記のように，承氏は，ここでは「彣」部が欠落しているので，次の「文」と並列させる形で補っている。

では，その他の欠字部分についても見ておこう。引用は四部叢刊本に拠るが，承氏校勘記の増補は［　］で表し，異同のある所は下線を引き，直後にその詳細を記した。

まず，「b105鼻」であるが，これは正確には，大字になっているものがないということである。

> 盾亦通蔽眉目鼻、故次之以**自**[28]、［自鼻也、］白亦自也[29]、故次之以**白**、［次之以］鼻（校勘記は大字[30]とする）、百出於白也、皕二百也[31]（校勘記は「二百爲皕」に作る）、故次之以**皕**、鳥之習飛以气、白（校勘記は「鼻」に作る）气所由出也　【巻三一　部敍上】
>
> （盾も亦た眉目鼻を通蔽す、故に之に次ぐに自を以てす、［自は鼻なり、］白も亦た自なり、故に之に次ぐに白を以てす、［之に次ぐに］鼻［を以てす］、百は白より出づるなり、皕は二百なり、故に之に次ぐに皕を以てす、鳥の飛ぶことを習うに气を以てす、白は气の由りて出づる所なり）

盾も眉目鼻を蔽うものであるので，「盾」には「自」部が続く。［自は鼻であり］白もまた自であるので，「白」部に続く。この後，四部叢刊本は「鼻・百は白から出ており，皕は二百であるので，皕部に続く」となっており，「鼻」部が抜けている。承氏は「次之以」の3字を補い，「鼻」を大字にすることで，この欠落を修正している。妥当な修正であるが，一方，もともと「次之以」の3字はなく，「鼻」が大字になっていただけであったため，他と体例を合わせるため，鼻だけが小字にされたとも考えられる。いずれにしても，この部分は伝写の過程での脱誤と考えるのが妥当であろう。

次に「b218**𠷎**」について見てみよう。

23）「須、面毛也」（巻十七　須部）

24）「彡、毛飾畫之文也（略）、臣鍇曰、古多以羽旄爲飾」（巻十七　彡部）

25）「彣、**鹹**也」（巻十七　彣部）

26）「髟、長髮猋猋也」（巻十七　髟部）

27）「后、繼體君也」（巻十七　后部）

28）「自、鼻也」（巻七　自部）

29）「白、此亦自字也」（巻七　白部）。なお，この字は89頁の「b284白」（巻十四）とは別字である。

30）校勘記では，四部叢刊本で大字としているところを太字で表すが，ここでは便宜的に四部叢刊本の体例に基づいて大字とした。

31）「皕、二百也」（巻七　皕部）

翹而垂（校勘記は「葉生而**巫**」に作る）、故次之以**巫**[32]、垂者草木之華也、故（校勘記は「**𠷎**亦**巫**者、故次之以**𠷎**、」に作る）次之以**華**、［華重則］木頭曲而**禾**[33]（校勘記にはこの2字なし）、故次之以**禾**、曲而稽留【巻三一　部敍上】

（翹（たか）くして垂る、故に之に次するに**巫**を以てす、垂るる者は草木の華なり、故に之に次するに**華**を以てす、［華重ければ則ち］木頭曲がりて**禾**（とど）む、故に之に次するに**禾**を以てす、曲がりて稽留す）

四部叢刊本は，「高くなって垂れ下がるので，『**巫**』部に続き，垂れ下がるのは華であるから『華』部に続く」と言い，「**𠷎**」部がない。そこで承氏は「**巫**」部の後を「**𠷎**もまた垂れる者であるので，『**𠷎**』部に続き，『華』部に続く」に改める。しかし，「**𠷎**」は説解に「草木華也」（巻十二 **𠷎**部）とあることから，ここでは「故次之以**𠷎**（、故次之以）**華**」と並列されていた「**𠷎**（、故次之以）」が伝写の過程で抜け落ちたものと考えた方が妥当ではないだろうか。

「b240囧」については，次のようになっている。

日月有食之、故次之以**有**、食必明（校勘記は「食無損於明」に作る）、故次之以**明**、［次之以**囧**、囧亦明也[34]、］明而夕[35]、故次之以**夕**、重夕爲多矣（校勘記は「矣」の字なし）、故次之以**多**【巻三一　部敍上】

（日月に之を食する有り、故に之に次するに有を以てす、食すれば必ず明（てら）す（校勘記「食すれど明を損する無し」）、故に之に次するに明を以てす、［之に次するに囧を以てす、囧も亦た明なり、］明して夕（く）る、故に之に次するに夕を以てす、夕を重ぬるを多と爲す、故に之に次するに多を以てす）

日と月には蝕があるので，「月」部には「有」部が続く。「有」の説解には「不宜有也、春秋傳曰、日月有食之」（巻十三 有部）とあり，ここは説解で本義「宜しく有るべからず」を説明するために引用された春秋伝の語を利用していることが分る。蝕したら必ずまた照らすから「明」部に続く。この後に承氏は，「囧部に続く，囧はまた明るいということである」として「囧」部を補う。更にこの後は，明るくなって後に日暮れになるので「夕」部に続く，となる。やはり，類義のものが並列されている部分が，伝写の過程で脱誤したと考えられる。

次に，「b279网」と「b284白」を併せて見ておこう。

32）「**巫**、草木葉華**巫**」（巻十二 **巫**部）

33）「**禾**、木之曲頭止不能上也」（巻十二 **禾**部）

34）「囧、窗牖麗廔闓明也」（巻十三 囧部）

35）「夕、暮也」（巻十三 夕部）

重覆之、故次之以**冂**[36]、冂者（校勘記は「冃」に作る）所以冒首[37]、故次之以**冃**、兩（校勘記は「冃」に作る）者兼冒也、故次之以**网**[38]、［兩目相積者网[39]、故次之以**网**、］网而西[40]覆之（校勘記は「网以覆物」に作る）、故次之以**襾**[41]、所以覆者巾、故次之以**巾**、巾（校勘記及び祁刻本は「市」に作る）似巾、而蔽膝者市（校勘記にこの5字なし）、故次之以**市**[42]、帛爲巾[43]也（校勘記は「市以帛」に作る）、故次之以**帛**、［帛色白、故次之以**白**、］白帛之（校勘記は「易」に作る）敝[44]、故次之以**㡀**　【巻三一　部敍上】

（重ねて之を覆う、故に之に次ぐに**冂**を以てす、冃なる者は首を冒う所以、故に之に次ぐに冃を以てす、兩なる者は兼ねて冒うなり、故に之に次ぐに**网**を以てす、［兩目相い積む者は网、故に之に次ぐに网を以てす、］**网**びして之を襾覆す（「网以て物を覆う」）、故に之に次ぐに襾を以てす、覆う所以の者は巾、故に之に次ぐに巾を以てす、市は巾に似たり、而して膝を蔽う者は市、故に之に次ぐに市を以てす、帛もて巾（市）を爲るなり、故に之に次ぐに帛を以てす、［帛の色は白、故に之に次ぐに白を以てす、］白帛敝（やぶ）れ易し、故に之に次ぐに㡀を以てす）

重ねて覆うから「**冂**」部に続き，冃は首を覆うものであるので「冃」部に続く。兩は合わせ覆うということであるから「**网**」部に続く。この後に，承氏は「二つの網目が集まったものが网であるから『网』部に続く」として，「网」部を補っている。この部分は「**网**」と「网」の字形が似ていることから，伝写の間に「网」部に至る説明部分がすっぽり抜け落ちたのではないかと思われる。そうであれば，後に続く「**网**而西覆之」の部分は，もともと「网而襾覆之（网もて之を襾覆す）」のようになっており，脱文により意味が通じなくなったので「网」を「**网**」を改めたのではないだろうか。

では，後半部分はどうだろうか。「市（韍）」部の後を見ていこう。

帛（きぬ）で韍（膝掛）を作るから「帛」部に続く。承氏はこの後に「帛の色は白であるので，『白』部に続く」という部分を補う。その後は，「白帛は破れやすいので，『㡀』部が続く」となる。ここで帛は白いものであるので「白帛」はいささか違和感があり，何らかの脱誤が疑われる。承氏の増補は妥当なようであるが，その通りであったかどうかは判断がつかない。

ここまで見てきたように，欠字は同義或いは類義の文字が続き，「故次之以某、故次之以某」のように同様のフレーズが連続していたと考えられる場合に多い。伝写の過程での脱誤が起き

36）「**冂**、重覆也」（巻十四 **冂**部）
37）「冃、小兒及蠻夷頭衣也」（巻十四 冃部）
38）「**网**、再也」（巻十四 **网**部）
39）「网、庖犧所結繩以漁也」（巻十四 网部）
40）祁刻本は「西」を「襾」に作る。
41）「襾、覆也」（巻十四 襾部）
42）「市、韠也、上古衣蔽前而巳、市以象之」（巻十四 市部）
43）祁刻本は「巾」を「市」に作る。
44）「㡀、敗衣也」（巻十四 㡀部）

やすい状況であったと言えよう。

では，次に小徐本の順序と大徐本・段注との順序が異なる「b192畐，b193𠦪（厚字）」について見てみよう。

高所以享[45]、故次之以亯、亯必滿、故次之以畐、畐滿也[46]、滿厚[47]、故次之以𠦪、厚者斂而取之、故次之以亩[48]、廩而愛[49]之　【巻三一　部敍上】

（高きは享（たてまつ）る所以、故に之に次ぐに亯を以てす、亯（たてまつ）れば必ず滿つ、故に之に次ぐに畐を以てす、畐は滿つるなり、滿は厚なり、故に之に次ぐに𠦪を以てす、厚くする者は斂（おさ）めて之を取る、故に之に次ぐに亩を以てす、廩（おさ）めて之を愛づ）

高いということは献上する理由となることから「亯」部に続く。献上すれば必ず満ちるので，満ちるという意味の「畐」部に続き，満ちれば厚くなるので「𠦪」部に続く。厚くするには，集め取るので「亩」部に続く。

ここで小徐は意味の上での繋がりによって説明を行なっており，この流れで考えれば，小徐本本来の部の配列は，今本「通釋篇」・「部敍篇」・敍目の通りであったと考えられる。大徐本が「b193𠦪」部を「b192畐」部の前に置き，段注がそれに従うのは，「𠦪」の字が説解に「從反亯（反亯に從う）」（巻十　𠦪部）とあるように，形の上での繋がりから「亯」部の次に来るべきだと考えたからであろう。しかし，大徐本と小徐本はそもそも基づいたテキストが異なると考えられる[50]ため，大徐本を根拠として両部の順が逆であったとは言えない。承氏は「又𠦪畐克录書中與鉉倒易、而部敍則同鉉、葢屬鈔寫之譌（又た𠦪畐克录、書中鉉と倒易す、而して部敍は則ち鉉と同じ、葢し鈔寫の譌りに屬さん）」というが，「部敍篇」も大徐本とは異なる。承氏は校勘記の中で「姑く趙氏宧光本を用いて刪正し附錄す」と述べており，その基づいた趙宧光本と四部叢刊本は同系統のもののはずであるので，「部敍篇」が大徐本と同じというのは何かの誤りであろう。

それでは，次に承氏も言及している「b251录，b252克」を見てみよう。これは，小徐本「通釋篇」のみ順序が逆になっている。

鼐之（校勘記にこの２字なし，今これに従う。これ以外の異同については省略する）鼎器之銘

45）「亯、獻也、（略）啅、篆文亯」（巻十　亯部）

46）「畐、滿也、從高省、象高厚之形」（巻十　畐部）

47）「𠦪、厚也、從反亯」（巻十　𠦪部）

48）「亩、穀所振入、宗廟粢盛、倉黃亩而取之、故謂之亩、（略）廩、亩或從广禾」（巻十　亩部）

49）祁刻本「愛」を「受」に作る。

50）大徐本と小徐本が基づくテキストが異なることについては，「『說文解字繫傳』の特徴についての考察（一）」（『言語文化研究』第20号　1994年３月）159頁から160頁参照。また，段氏は「凡徐氏鉉鍇二本不同、各从其長者」（一篇上　上部「旁」注）と述べ，大徐・小徐が異なる場合は，その優れた方に従うとしている。

刻也、故次之以**克**、克刻也、成而录录然、故次之以**录**[51]、器成而食、故次之以**禾**、禾之生必勻 【巻三一 部敍上】

（鼎器の銘刻なり、故に之に次ぐに克を以てす、克は刻なり、成りて录录然たり、故に之に次ぐに录を以てす、器成りて食す、故に之に次ぐに禾を以てす、禾の生ずるや必ず勻たり）

鼎の銘刻であるから，刻するという意味の「克」部が続く。銘刻が完成してはっきりしているので，「录」部に続く。器ができてから食するので，「禾」部に続く。

ここでも，意味の流れが自然であるため，小徐本本来の配列順は「部敍篇」の通りであったと思われ，承氏の言のごとく，「通釋篇」は伝写の過程で誤写されたものであろう。

小徐本叙目のみ欠字となるのが「b262 杭」，「b391 矢，b392 夭」は小徐本叙目のみが順序が逆になっている。詳細は省略するが，小徐本本来の順序は「部敍篇」の通りであり，敍目は後に改められたものと考えられる。

以上，「通釋篇」と「部敍篇」の配列順が異なるものを中心に見てきた。そのほとんどが，「部敍篇」の配列が小徐本本来の配列であったと考えられる。一方「通釋篇」は，大徐本の配列に合わせるため後世改められたり，伝写の過程で誤られたりした結果，本来の姿ではなくなったものが多い。ただ，「b328 首」「b329 県」のみは，「部敍篇」の方が伝写の過程で誤られたと考えられる。また，欠字部分に関しては，判断材料が少なく，明確には言えない。しかし，「部敍篇」が540部の配列の意味を説くものであるから，すべての部に言及されていたと考えるのが自然である。伝写の過程で脱誤したと考えるのが妥当であろう。また，同義或いは類義の文字が続き，「故次之以某、故次之以某」のように同様のフレーズが連続していたと考えられる場合に，脱誤が起きやすかったと考えられる。

三 『說文』「後敍」の「據形聯系」の解釈について

「據形聯系」は，部の配列について，許慎自身が述べている言葉である。本章では，まず小徐及び段氏が，許慎の「據形聯系」という言葉をどのように解釈しているかを検討した後，両氏が各部の配列順についてどのように述べているのかを検討する。それにより「部敍篇」に表れた小徐の考え方の特徴を明らかにしたい。

まず最初に，許慎がどのように部を構成し配列したか，また，小徐と段氏が，それをどのように解釈しているかについて見てみよう。

「後敍」には，許慎が部の構成・配列の仕方について述べた部分がある。

51）「录、刻木录录、象形也、（略）臣鍇曰、录录猶歴歴也、一一可數之皃」（巻十三 录部）

其建首也、立一爲耑、方㠯類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、雜而不越、據形聯系、引而申之、㠯究萬原、畢終於亥、知化窮冥

（其れ首を建つるや、一を立て耑と爲し、方は類を㠯て聚まり、物は羣を以て分れ、同條牽屬し、共理相い貫く、雜して越えず、形に據りて聯系す、引きて之を申べ、㠯て萬原を究む、畢（つい）に亥に終え、化を知り冥を窮む）【巻三十　後敍】

最初に，部がどのようにできたかを述べる。部首を立てるに当たって，まず「一」をその端緒とする。同類のものは集まって同じ部となり，万物は仲間ごとに群れを成して分かれて異なる部となる[52]。筋道の同じものを連ね，雑多であるがお互いに属するものがあり，それを越えることはない[53]。

ここまでが，部の構成方法について述べた部分である。

次の「據形聯系、引而申之、㠯究萬原、畢終於亥、知化窮冥」では，主に完成した部をどのように配列していくかについて述べられる。

その部は形によって繫がり，一つの部から次の部へと変化して，それによって万物の源を極め尽くす。「亥」部に至って終わり，変化の道を知り，奥深い作用を窮める。

ここで，部の配列について述べた「形に據りて聯系す[54]、引きて之を申ぶ、㠯て萬原を究む」について，小徐及び段氏がどのように解釈しているかを，その注に基づいてもう少し詳しく見ておこう。

小徐には「臣鍇曰、據形聯系、謂之部、因次㠯匕部、從㠯究盡萬事之原也（臣鍇曰く、形に據りて聯系すは、之れ部を謂う、次に因りて㠯て部を匕（なら）ぶ、從りて㠯て萬事の原を究盡するなり）」という極めて簡単な注があるのみである。「形に據りて聯系す」，つまり，（字）形によって繫げるとは，部のことを言っているとし，（形の類似により）順番に部を並べてゆき，それによって，あらゆることの源を明らかにするとしている。

「敍」に対する小徐の注は，概して簡単なものが多い。ここでも小徐は，「形に據りて聯系す」に対して，「部のことを言う」という短い注を付すのみである。

では，段氏はどうであろうか。段氏は「形に據りて系聯す」に対して「五百四十部の次弟を謂う、大略形を以て相い連次し、人をして記憶し檢尋に易なら使む、八篇人部に起すれば、則ち全篇三十六部皆人に由りて之に及ぶが如きは是れなり、或いは義を以て相い次ぐ者有りと雖も、但だ十の一なるのみ、部首の形を以て次と爲すは、六書は象形に始まるを以てなり、毎部

52）「方㠯類聚、物㠯羣分」に対し，段氏は「類聚、謂同部也、羣分、謂異部也」（十五篇下）と述べる。

53）「方㠯類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、雜而不越」に対し、小徐は「臣鍇曰、類聚爲水部、**㳄**部相次、同條共理、謂中之類、與中同從冂而貫之、雖雜而各有部分、不相踰越也」と述べている。なお，「**㳄**」は祁刻本は「水」に作るが，校勘記により改めた。

54）段氏は，この「聯系」を，大徐に従い「系聯」に作る。（十五篇下）

の中、義を以て次と爲すは、六書は轉注に歸するを以てなり[55)]」と述べる。つまり，540部の順序は概ね形によっており，記憶しやすく検索しやすくしていると言う。更に八篇を例に挙げ，「人」部に始まる全36部はすべて「人」に由来しており，意味によって配列されたものは十分の一に過ぎないとする。ここで段氏は，『說文』部の配列はほとんどが形によるものであることを，はっきりと述べている。

続く「引きて之を申ぶ」には「一の形由り之を引きて五百四十の形に至るを謂うなり」というように，やはり形がその配列の基準となることを言う。最後の「目て萬原を究む」については，天地鬼神，山川艸木，鳥獸蚰蟲，雜物奇怪，王制礼儀などすべてが挙げられているということだとする。このように，段氏は「後敍」の解釈において，一貫して字形による配列であることを説いている。

それでは次に，「據形聯系」の注で段氏が例として挙げている「人」部から始まる部分について，両者の記述を比べてみよう。

段氏は，まず，それぞれの篇に含まれる部を挙げ，それぞれの部が何番目の部であるかを示す。その後に双行の注を付して，前後の部の繋がりを説明する。また，部首字の部分は小篆で示されているが，ここでは楷書に改めて表示する。双行の注は，（　）で示す。

人部二百八十七（不蒙上）
匕部二百八十八（倒人而次之）
匕部二百八十九（反人而次之）
从部二百九十（竝人而次之）
比部二百九十一（反从而次之）　【十五篇上　敍目】

このように，多くの場合，簡潔に前の部との関係を説明するのみである。「人」部は「上を蒙らず」とあり，前部とは関係がないことを明記する。前部を受けないことを明記するところは，段注では珍しくない。「形無所蒙（形に蒙る所無し）」[56)]など別の表記のものや，注がなく関係が分らないものを含めると，実に80箇所を超える。

「匕」は「人」を逆さまにしたものであり，「人」部に続く。「匕」は「人」を引っ繰り返したものである。ここでは，前部を受けるのではなく，その前の「人」部から続くと説明する。段注では，繋がりを説明する語句の後に「而次之（而して之に次ぐ）」ということが多い。次の図

55）原文は以下の通り。なお，以下も含めて，対象部分について，関係あるところを抜粋したものである。「謂五百四十部次弟、大略以形相連次、使人記憶易檢尋、如八篇起人部、則全篇三十六部皆由人而及之是也、雖或有以義相次者、但十之一而已、部首以形爲次、以六書始於象形也、每部中以義爲次、以六書歸於轉注也、（略）古屈伸字多作詘信、亦作申、說文人部有伸篆、解云屈伸、近字也、謂由一形引之至五百四十形也、究者、窮也、謂天地鬼神、山川艸木、鳥獸蚰蟲、襍物奇怪、王制禮儀、世間人事、莫不畢舉」

56）「b121華」部，「b123幺」等がそれである。但し，「b128放」部に「形無所蒙、仍遠蒙支也」とあり，離れた「b092支」部との関係を述べるように，繋がりについて何らかの説明があるものは含めない。

は，この決まったフレーズを外して，一連の部の繫がりを簡単に示したものである。段注では八篇全ての部について言及されるが，ここでは，前半のみを挙げる。「b」の後の数字は部番号であり，「：」の後には繫がりを示す語を抜粋してある。

b287人：不蒙上→b288匕：倒人
→b289匕：反人
→b290从：竝人→b291比：反从
→b292北：二人相背→b293丘：蒙北
→b294丞：从三人
→b295壬：蒙人→b296重：蒙壬
→b297臥：仍蒙人
→b298身：蒙人→b299月：反身也
→b300衣：衣从二人也→b301裘：蒙衣
→b302老：蒙人→b303毛：蒙老从毛→b304毳：蒙毛
→b307尾：蒙毛蒙尸
→b305尸：象人臥→b306尺：蒙尸
→b308履：蒙尸→b309舟：蒙履从舟→b310方：蒙舟

このように，段注では，形の類似に基づき，必ずしも直前の部にこだわらず，その関係を説いている。前にある部との関係が見いだせない場合は，その旨を明記している。

では，小徐はどうだろうか。同じ「人」部から「方」部が，「部敍篇」ではどのように説明されているかを見てみよう。

人、人[57]、天成地平、人生其閒、盈天地之閒惟人、人久則匕[58]、故次之以**匕**、匕而比之、久而不遺也、故次之以**匕**[59]、匕比而相从[60]、故次之以**从**、反道相从爲比[61]、故次之以**比**、有比必有背、故次之以**北**、北背也、背而求衆、故次之以**丞**、丞衆也、衆依於丘、故次之以**丘**、丘土之厚也、故次之以**壬**、壬者厚也、故次之以**重**、裘衣之重也、故次之以**裘**、童子不衣裘、故次之以**老**、老則毛髮先變、故次之以**毛**、毳細毛也、故次之以**毳**、尸者毛所主也、故次之以**尸**、尸者身也、以身爲尺度、故次之以**尺**、尾尸之後、故次之以**尾**、

57)「人、天地之性最貴者也、（略）臣鍇曰、人配天地爲三才、萬物之最靈」（巻十五 人部）
58)「匕、變也、從到人」（巻十五 匕部）
59)「匕、相與比敍也、從反人」（巻十五 匕部）
60)「从、相聽許也、從二人、（略）臣鍇曰、言計相聽也、許謂從諫也」（巻十五 从部）
61)「比、密也、二人爲从、反从爲比、（略）臣鍇曰、相與周密也」（巻十五 人部）

寢不尸、故次之以**臥**、臥以安身、故次之以**身**、反身必有依、故次之以**月**、衣者身之飾、故次之以**衣**、衣所以明禮、故次之以**履**、履禮也、履所以載人、故次之以**舟**、大夫方舟、故次之以**方**」【巻三二　部敍下】

（人、人なり、天成り地平らなり、人其の間に生ず、天地の間に盈つるは惟れ人なり、人久しければ則ち匕（か）す、故に之に次ぐに匕を以てす、匕して之を比（なら）ぶ、久しければ遺さざるなり、故に之に次ぐに匕を以てす、（匕）比びて相い从う、故に之に次ぐに从を以てす、道を反りて相い从うを比と爲す、故に之に次ぐに比を以てす、比する有れば必ず背く有り、故に之に次ぐに北を以てす、北は背くなり、背けば衆を求む、故に之に次ぐに丞を以てす、丞は衆なり、衆は丘に依る、故に之に次ぐに丘を以てす、丘は土の厚きなり、故に之に次ぐに壬を以てす、壬なる者は厚きなり、故に之に次ぐに重を以てす、裘は衣の重きなり、故に之に次ぐに裘を以てす、童子は裘を衣（き）ず、故に之に次ぐに老を以てす、老いれば則ち毛髮先に變ず、故に之に次ぐに毛を以てす、毳は細毛なり、故に之に次ぐに毳を以てす、尸なる者は毛の主とする所なり、故に之に次ぐに尸を以てす、尸なる者は身なり、身を以て尺度と爲す、故に之に次ぐに尺を以てす、尾は尸の後、故に之に次ぐに尾を以てす、寢（い）ぬるに尸（し）せず、故に之に次ぐに臥を以てす、臥して以て身を安んず、故に之に次ぐに身を以てす、身を反すに必ず依るところ有り、故に之に次ぐに月を以てす、衣なる者は身の飾なり、故に之に次ぐに衣を以てす、衣は禮を明らかにする所以、故に之に次ぐに履を以てす、履は禮なり、履は人を載する所以、故に之に次ぐに舟を以てす、大夫は方舟なり、故に之に次ぐに方を以てす）

人は人である。天ができ地が平らかになり，人がその間に生まれる。天地の間に満ちるものは人である。人は長い間には変化する。故に「人」部には「匕」部が続く。変化したものを並べれば，長い間には残すところがなくなる。（この部分は，意味がよく分らないために，承氏は「人相比敍（人相い比敍す）」に改める。これによれば，人が互いにぴったりと並ぶとなる。）そこで「匕」に続く。（承氏は「匕」字を削除する。今それに従う。）並んで互いに従うので，「从」部に続く。（次の「反道相从爲比」も，このままでは意味が分らない。「比」の小徐注に「反从爲比」とあるので，ここではそれによって読む。）「从」を裏返したものが「比」なので，「比」部に続く。並べば必ず背くものがある。そこで背くという意味の「北」部に続く。

これ以降については，「b293丘，b294丞」，及び「b297臥」から「b307尾」について論じた部分（85頁，及び84頁）と大部分が重なるので，ここでは省略する。

このように，小徐は，ほぼすべて，直前の部から次の部へと続くように説明していく。たとえかなり強引な説明となったとしても，その態度は一貫しているように思われる。言わば各部を一本の線で結ぶことを目指しているようである。これは，段氏が，その多くは「人」部を受けると説明するのとは大きく異なる。また，段氏が主に字形の類似によって繋がりを説明しようとしているのに対して，「部敍篇」の小徐は専ら意味の上での繋がりによって説明しょうとし

ているように見える。

「後敘」の「據形聯系」の解釈は，その簡潔であるか詳細であるかの違いはあるものの，両者ともに一致しており，部の配列が字形によるものであるとする。字形の類似だけに依り配列されているとすると，両者にそれほど大きな差はできるはずがなく，ともに段氏のようになるはずである。では何故，実際の配列についての説明に，これほど大きな違いが生じたのであろうか。

ここで想起されるのは，許慎「後敘」のうち，部の構成・配列を述べた部分に，『易』「繫辭傳」に典拠を持つ言葉が多いことである。もう一度「後敘」の文を見てみよう。該当箇所に下線を附す。

> 其建首也、立一爲耑、方㠯類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、雜而不越、據形聯系、引而申之、㠯究萬原、畢終於亥、知化窮冥
>
> （其れ首を建つるや、一を立て耑と爲し、方は類を㠯て聚まり、物は羣を以て分れ、同條牽屬し、共理相い貫く、雜して越えず、形に據りて聯系す、引きて之を申べ、㠯て萬原を究む、畢（つい）に亥に終え、化を知り冥を窮む）【巻三十　後敘】

まず最初の部分は，「繫辭傳」の以下の文に基づく。

> 天尊地卑、乾坤定矣、卑高以陳、貴賤位矣、動靜有常、剛柔斷矣、方以類聚、物以羣分、吉凶生矣　【易　繫辭上】
>
> （天は尊く地は卑しくして、乾坤定まる、卑高以て陳（つら）なりて、貴賤位す、動靜常有りて、剛柔斷（さだ）まる、方は類を以て聚まり、物は羣を以て分れて、吉凶生ず）

これは，『易』が宇宙の構造に象どって作られたこと述べた部分であり，本田氏[62]によってその大意を述べると，以下のようになる。天は上にあって尊いのに対して，地はその地位は天よりは卑しい。（天地の位に照応して）乾と坤の卦が定まった。万物が序列をなしているのに象って，易の卦の六爻の位が定められた。（陽は動，陰は静と）陰陽の動静に恒常性があるのに応じて，剛爻と柔爻とが判然と分かたれた。善い方向に向かうものは，善いもの同士集まり，悪い方向に向かうものは，悪いもので集まる。善いものばかり，悪いものばかり，それぞれ群をなして分かれる。（そのように物の善し悪しには，同類がついてまわるので，）易の卦に吉と凶の別途の占断が生じたのである。

このように，『易』の卦爻等が形成される過程を述べた部分，特にそれらが吉凶に分かれて行

62）本田済著『易（下）』（中国古典選 2　朝日新聞社　昭和 53 年 5 月）257 頁から 258 頁参照。

くことを述べた部分の語句が，『説文』の部が同じ傾向を持つものが同部となり，また傾向を異にするものが異部へと分化することを述べた部分に用いられている。

次に，「雜而不越」は，同じく「繫辭傳」の

子曰、乾坤其易之門邪、乾陽物也、坤陰物也、陰陽合德而剛柔有體、以體天地之撰、以通神明之德、其稱名也雜而不越 【易 繫辭下】

（子曰く、乾坤は其れ易の門か、乾は陽物なり、坤は陰物なり、陰陽德を合わせて剛柔體有り、以て天地の撰を體し、以て神明の德に通ず、其に名を稱するや雜して越えず）

に基づき，「知化窮冥」は，

過此以往、未之或知也、窮神知化、德之盛也 【易 繫辭下】

（此を過ぎて以往は、未だ之を知る或（あ）らざるなり、神を窮め化を知るは、德の盛んなるなり）

に基づいている。なお、「引而申之」は、次頁に挙げた「繫辭傳」に基づく。

最初の部分は，以下のような意味である[63]。乾の陽と坤の陰が交わって，乾坤がさまざまの卦に変化することで，天地の作りなしたものを具象化し，造化の奥にあるあらたかな神の德と通じあう。卦爻の名乗る物の名は雑多であるが，天地の作りなしたものを越えることはない。

部の構成について述べた部分に，『易』の中でも，乾坤の卦が変化してできた64卦が天地の作った全てのものを具象化し，それら雑多な物の名を名乗ることを述べた部分の語句を使っている。

また，段氏は「後敍」（十五篇下）の「化を知り冥を窮む」に注して，『易』の「神を窮め化を知る（現象の奥にある神の作用を窮め，変化の道を知る）」ことであるとする。

このように短い文章の中に，『易』「繫辭傳」の卦爻等が形成され，その64卦が天地の作った全てのものを具象化していることを述べた部分の言葉を使用していることは，その後の「目て萬原を究む」という句と相まって，540の部とそれに属する文字で世の中の全てのことを網羅しているという自負を表わすと考えるのは，穿ち過ぎであろうか。いずれにしても，少なくともこのことが，小徐に影響を与えたことは間違いないであろう。

小徐は「部敍篇」の制作意図を述べた「系述篇」の記述に，『易』「繫辭傳」に典拠を持つ言葉を用いている。やはり，『易』の卦が天下に起こり得ることの全てを表わすことを述べた部分である。

63）注62）所掲書，331頁の解説による。次の引用についても，同323頁によると，次のようになる。ただこれ以上の段階となると，極致の世界に入るので常人には知ることができない，現象の奥にある神の作用を窮め，変化の道を知るというのは，それこそ德を高めた極致，聖人の域に達して始めて可能となろう。

是故四營而成易、十有八變而成卦、八卦而小成、引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣　【易　繫辭上】

（是の故に四營して易を成し、十有八變して卦を成す、八卦にして小成し、引きて之を伸べ、類に觸れて之を長ずれば、天下の能事畢わる）

本田氏[64]によって大意を見ると，以下のようになる。四つの営みによって第一変ができ，九変で三画卦，いわゆる八卦ができる。この八卦を引き伸ばして，六画に仕上げれば六十四卦ができる。（六十四卦に卦爻辞を附することで，天下の事の類例はほぼ尽くされるが，さらに陰爻と陽爻と互いに変じ得る故に，）その類例は互いに触れ合って無限の適用可能性を孕み，天下に於て起こり得るすべての事は，この易の中に完結していることとなる。

小徐は，これを踏まえて，

分部相屬、因而繹之、觸類而長之、以究竟天下之事　【巻四十　系述】

（部を分かち相屬す、因りて之を繹ぬ、類に觸れて之を長ずれば、以て天下の事を究竟す）

と言う。やはり，許慎同様，『說文』の540部及び所収の文字は世界のすべてのことを表わすものであると考えているのではないだろうか。もしくは，許慎の意図するところがそこにあると考え，許慎の表わそうとした世界を解き明かそうという意図があったのではないだろうか。

また，「系述篇」は更に続けて「久則不昭、昧則無次、抽其緒、作部敍第三十一至三十二（久しければ則ち昭らかならず、昧ければ則ち次なし、其の緒を抽きて、部敍第三十一から三十二に至るを作る）」と述べる。許慎の時代から年月を経て明らかではなくなった次（順序）の意味の端緒を引き出すために「部敍篇」を作ったとする。字形（の類似）にのみ依る配列ならば，時代を経て明確ではなくなることはない。字形だけでは説明できない隠された意図がある―例えば，「b001一」の次は「b479二」や「b010丨」等ではなく，何故「b002丄」であるのか，そこにも偶然ではない必然性がある―と考えたのではないだろうか。そして，それが意味の上での繋がりであると考えたのではないであろうか。それはちょうど各部は字形の類似により配列されているが，（同じ部首を持つ）部内の文字は字形ではなく意味の関連により配列されている[65]のと同じ―まず字形に依り，次に意味に依る―である。

許慎も小徐もともに『易』を意識していた[66]とすれば，「部敍篇」の記述が「序卦傳」を襲う

64）注62）所掲書288頁参照。

65）段注に「凡毎部中字之先後、以義之相引爲次（凡そ毎部中の字の先後、義の相い引くを以て次と爲す）」（一篇上　一部末注）とある。

66）『易』との関係を窺わせる点はほかにもある。「部敍篇」は分量的には1巻でも不自然ではないにもかかわらず，わざわざ2巻に分けられており，下巻はこの「人」部から始まる。上巻最後の「黹」部には「音致」という音注があるのみであり，また，見てきたように下巻のはじめには「人」部と前の部を繋ぐ記述がない。このことは，『說文』が三才（やはり『易』「繫辭傳」に見える）の「天」を最初の巻に，「地」を最後の巻に，「人」をほぼ真ん中にというように

ものとなったのも，また必然であったのではないだろうか。

「序卦傳」は卦の序列の意味を説明するものである。次の文は，その冒頭部分である。

> 有天地然後萬物生焉、盈天地之間者唯萬物、故受之以屯、屯者盈也、屯者物之始生也、物生必**蒙**、故受之以**蒙**、**蒙**者**蒙**也　【易　序卦傳】
>
> （天地有りて然る後に萬物生ず、天地の間に盈つる者は唯だ萬物なり、故に之を受くるに屯を以てす、屯なる者は盈つるなり、屯なる者は物の始めて生ずるなり、物生ずれば必ず**蒙**、故に之を受くるに**蒙**を以てす、**蒙**なる者は**蒙**（おろ）かなり）

天地があって万物が生じ，天地の間には万物が満ちる。屯とは満ちるということであるから，「乾」「坤」（天と地）の後に「屯」の卦が来る。屯とはまた物の始めて生ずることである。物が生じた直後は必ずおろかである。故に「屯」卦の後には「**蒙**」卦が置かれる。**蒙**とはおろかということである。

「部敍篇」の「故次之以」という言い回しは，「序卦傳」の「故受之以」に倣ったものであるだけでなく，その説明の仕方も，やはり「序卦傳」に倣ったものであろう。

承氏は「序卦傳」の形式に倣ったことを，小徐の意図を反映したものかどうかに疑いを示している[67]。しかし，『說文』「後敍」の文が『易』を意識したものであること，「序卦傳」との用語の類似，「系述篇」も同様に『易』の語を用いており，許慎の表そうとした世界を解き明かそうという意図が見えること，また，小徐が「通釋篇」においても意味の繋がりを最も重視していることなどから，「部敍篇」が「序卦傳」の形式にならっていることは，むしろ小徐の意図を反映したものだと言うべきではないだろうか。

小徐は勿論，許慎が部の配列を主に形の類似に求めていることを認識している。「後敍」の注からもそのことは明確である。にもかかわらず，できるだけ意味の関連により説明しようとしたことは，一つには，小徐が字形の分析においても，音よりも意味を重視したこと[68]と軌を一にしており，意味を重視するという小徐の考えに基づくものと考えられる。しかし，より大きな理由は，許慎の「後敍」の言葉から，言外に表われた意図を汲み取り，「序卦傳」に倣って，540の部によって天下に於て起こり得るすべての事が網羅されているということを明らかにしようとしたことではないだろうか。承氏の言うように，「序卦傳」に擬することで，「部敍篇」の説明が破綻しているところが多くなっていることは確かである。しかし，許慎が形の類似によって部を配列したと述べていることを承知しながら，それでも敢えて「序卦傳」の形式に倣っ

配置したことと関係があると思われるが，このことについては，また別の機会に論じることとする。

67）「疑此部敍兩篇本非楚金所爲、乃次立等傳會繫傳之名而增竄、不知楚金命名之意在條繫通言、不必妄擬聖人序卦也、故其說多支離」（校勘記下「繫傳三十一下）

68）注50）所掲論文第二章154頁から158頁参照。

て意味の繫がりを求め，まとまりのある姿を描き出そうとしたところにこそ，時代を経て明確でなくなった許慎の意図を解き明かそうという，小徐の意図が表われているのではないだろうか。

以上見てきたように，「部敘篇」の記述は，『易』「序卦傳」を意識したものであり，小徐の特徴である意味を重視するという態度が色濃く表れたものであると言えよう。また本稿では，今本小徐本「通釋篇」の部の配列は，次立等によって大徐本の配列に合わせて変更を加えられた部分があること，小徐本本来の部の配列順は，ほぼ「部敘篇」のそれと一致することを明らかにした。